

---

# 墮天使

玉蔓

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

墮天使

### 【Nコード】

N6108V

### 【作者名】

玉蔓

### 【あらすじ】

外科医である遠藤幸也は過去に一度過ちを犯した。彼はそれを闇に葬った。医療ミス、果たされた完全犯罪。だが、人の恨みの力は時に現実をも曲げてしまう。

## 起

心地よい揺れのせいで、少し眠ってしまったらしい。カーテンの隙間から外をのぞくと、どこかのパーキングエリアだろうか。両脇のトラックに挟まれる形でバスは広々とした駐車場に鎮座していた。他の乗客はみんな降りてしまったのであるうか。車内は静寂に包まれている。左手につけた腕時計に目を落とすと、それは午前3時を指していた。もうかれこれ6時間は走っていたのか。通りで腰も痛いはずだ。僕の席は最前列なので、後ろを振り向くと、必然的に他の乗客の顔を見ることになる。なんとなしに振り向くと、思った通り車内に人はほとんど残っていない。残っている人たちも先ほどの僕のように、眠りについてしまっている。僕はそこで何かの気配を感じた。いや、気配というよりも何か薄気味の悪い感覚。誰かが僕を見ている。それも悪意に満ちた目で。誰だ？そしてどこから見ているんだ？あたりを見渡しても、正体不明の視線の出所をつかむことができない。だんだんと気味が悪くなってきた僕は一度外の空気を吸おうと思い、上着を羽織り、裸足からサンダルに履き替えた。慣れない深夜バスでの旅に疲れてしまい、少しおかしくなっているだけだ。外の空気を吸えば、それも治る。

深夜のパーキングエリアは不思議な空気に包まれているように思う。広々とした駐車場にまばらに止まるトラックやバス。もちろん人もほとんどいない。売店も閉まり、自動販売機のみが動いているような寂しいはずの場所なのに、そこには不思議な温かさがある。

僕は自販機でブラックコーヒーを買って、ベンチに腰かけた。空を見上げると、今夜は満月のようだ。暗闇の中で真ん丸の月が美しい。僕の心の中にある悪いものや醜いものが全て浄化されていくようだ。そう僕の中にある汚いもの、汚い過去。浄化したい過去、忘れ去りたい過去。

だが、あれは僕のせいじゃない。もし僕のせいであっても、それ

は仕方のないことで、責められるべきことはしていないはずだ。そうだ。僕は悪くない。悪くなんか無い。悪いのは奴だ、奴なんだ。

ほんとうに？

抑揚のない無機質な声が僕の心で響く。声質から察するに少女の声だろうか。

ああ、間違いない。あいつが、あいつが5年前、俺にしたことと比べるとお釣りがくるくらいだ。そもそも俺はわざとやったわけじゃない。ベストは尽くしたさ。だが5年前の奴はどうだ？ 俺の、俺の世界で一番大事なものを、自らの欲望だけで奪い去りやがった。僕は気が付くと、正体不明の少女の声にこたえてしまっていた。

まるで本能がそうさせるように。

そう。あなたは彼を恨んでいた。だからあんな簡単な手術で失敗を犯した。それは取り返しのないことなのよ。わざとじゃないのかもしれない。いや、おそらくあなたはベストを尽くしのだと思うわ。だけどあなたの中にあつた、恨みや憎悪があなたに迷いを作った。そうでしょ？ そうじゃなきゃ、世界に名をはせる名外科医のあなたが、あんな簡単な手術でミスするわけないじゃない。気持ちはわかるわよ。昔愛した女と今は憎むべき相手となった過去の親友。そんな2人の子供の手術なんて、私情を挟むなってほうが無茶よ。

僕はプロだ。プロの医者だ。そんなことで落ち着きを失っていたら、盲腸の手術だつてできやしない。

それじゃあ、なんで二人の子供、由実ちゃんだっけ？ を殺しちゃったの？

あれは事故だったんだ。仕方がなかった。病院に運び込まれた段階でもう助からないことは決まっていたんだ。だいたいお前は誰だ？ どうして僕の心の中に入ってくる。トリックはなんだ。

トリック？ そんなものはありやしないわよ。私はあなたと話したかったから、あなたの心に少しお邪魔しただけ。もし、嫌なら出ていくわよ。別に直接あなたと話せばそれでいいんだし。けど、

あまりお勧めはしないわよ。あなたにとってそれはあまりいいことには思えないし。

ああ、とにかくこれ以上僕の心に土足で踏み込まないでくれ。早いとこ出て行ってくれ!!

## 承

気が付くと、僕は手に持っていた缶コーヒーを握りつぶしていた。感情が高ぶりすぎたのだろう。僕の昔からの悪い癖だ。それにしても今のはいったい。何者かが僕の心の中に、それも何か詳しいことを知っている様子だった。いや、そんなことはありえない。

「あーあ、もつたいたい。それほとんど飲んでないでしょ」

声の聞こえるほうを振りむと、そこには小学校低学年くらいの少女が立っていた。だが、暗闇で顔がよく確認できない。だが不思議なことに少女の表情ははつきりと認識することが出来た。冷たい笑い。そう形容するしかないくらいに彼女の微笑は冷たく、僕に本能的な恐怖を与えた。

「ねえ、私にもなんか買つてよ。6時間もバスに乗りっぱなしじゃ、さすがにくたびれちゃった」

口調は少女のそれとは到底思えない。しかもこの声どこかで聞いたことがある。

「あらっ　もしかして、この声聞いても誰か分からない？　無理ないか」　だつて忘れ去りたい汚くて暗い過去だもんね。いいわ。この顔を見たら嫌でも思い出すでしょう。なんせあなたが自らの手で殺めた子供の顔だもんね」

そう言いながら少女と思わしき謎の人物は私のほうに一步一步近づいてきた。私は自分の中の本能的な恐怖が急速に増幅するのを感じ、その場から逃げようとしたが、足がその場で重石のようになってしまい、動けない。そういうもがいているうちに暗闇に隠れていた少女の顔が僕の視界に飛び込んできた。そ

「由実ちゃん・・・　そんな、そんなはずがあるわけない。由実ちゃん、あの醜い男の娘は5年も前に死んだ！」　僕は震える声で少女に言った。

僕の前に現れた少女は正真正銘の由実だった。それも5年前の亡

くなる直前の姿のままです。

「そう。由実ちゃんは5年前に亡くなったわ。そう、あなたの手術ミスが原因でね。だけど由実ちゃんの父親はその事実には納得できなかった。だが、あなたと由実ちゃんの父親、定史さんは親友とおし、だから定史さんは表面上は納得したように見せた。だけど、彼は独自の調査を今日まで続けていたの」

「そ、それがどうした。いくら定史が調べようが無駄なんだよ。僕を罪に問うことなどできやしない！」

「そうね。あなたの言うとおり5年も前の手術のデータなんて残っているわけがない。たとえ残っていたとしてもあなたを立件することなどできない。あなたが故意に由実ちゃんを殺害したとしても」

由実ちゃんの姿をした謎の少女の言葉を聞いたとき、僕の心臓は激しく脈打ち、全身の血流が逆流していくのを感じた。なぜだ、なぜそれを知っている？ 手術室にいた看護師やほかの医師ですら知らない事実をなぜこいつが。

「しらばっくれようたってそうはいかないわよ。なんなら話そうか。あなたがなぜそこまで、由実ちゃんの父親、定史さんに敵意を抱くようになったかを。いや、やっぱり一緒に見に行こうか」彼女のその言葉が僕の意識を吸い取っていった。

目を覚ますと、僕は空を飛んでいた。いや、宙に浮かんでいたという表現が正しいか。ここはどこだ。僕はなぜ飛んでいる。よく思い出せ。俺は確か深夜バスに乗っていたはずだ。そうだ。そこで変な夢を見ていたんだ。夢に違いない、由実があんなところにいるはずないじゃないか。ということはこれも夢の中なのか。明晰夢つてやつだな。

「気が付いたようね。仕方ないわね。普通に生活してたらこんな経験することないものね」

声のほうに視線を向けると、そこには由実が僕と同じように浮かんでいた。由実によく似た何かが浮かんでいた。

「また、お前か。いつたいここはなんなんだ。なぜ僕の夢に現れる？」僕は少し感情を高ぶらせながら少女に迫った。

「夢？ これは夢なんかじゃないわ。現 うつつーなのよ。わかる？ げ・ん・じ・つ」その言い草にいらついた僕は語気を荒げながら、言葉を放った。

「夢でも何でもいいから早くここから出せ！」

「そんなに焦らないで。今からあなたにいいものを見せてあげる。来た来た。ほら、下を見てみて」

少女の視線の先に目を向けると一人の女性が遠くからこちらに走ってくるのが見えた。太陽が沈んだ後なのか、辺りは暗く、三日月の月光のみが、闇の中で輝いていた。女性が僕たちのちょうど真下のベンチに腰掛けた時、ようやくそれが誰なのか把握することができた。辺りをよく見渡すと、なにか見覚えがある。そうだここは美貴の家のすぐ近くの公園じゃないか。こんななじみ深い場所を忘れるとは。

「美貴？」

「そうよ。あれはあなたがかつて愛した女性でもあり、由実ちゃん

の母親でもある田之上美貴さんよ」

たしかにそれは美貴に間違いないが、今と少し雰囲気が違う。

「当たり前よ。あれは10年前の田之上美貴さんよ。しかし、驚いた。今も綺麗だけど、10年前の彼女めっちゃめっちゃ綺麗ね。相当モテたんでしょうね」

10年前・・・ 僕がまだ研修医で、看護師見習いの美貴と付き合ってた頃だな。それなのにあいつは、あいつは僕を裏切って。絶対に許さない。許してなるものか。

「見て。もう一人こちらに向かってくるわ」

見ると入口から定史がこちらに向かつて走ってきた。奴の顔を見た瞬間、僕の中に眠っていた憎悪の炎が瞬く間に熱を帯び始めた。定史は親しげに僕の美貴と話し始めた。美貴も心の底から楽しそうだ。そうだ、あれこそが僕が欲しかった彼女の笑顔。手に入れることが出来なかった美貴の笑顔だ。

「あいつ、僕と付き合ってるときは、一度としてあんな明るい表情僕に見せてくれたことなかったのに」そう語るうちにますます自分がみじめになり、この場を1秒でも早く離れたいと思った。

「ねえ、何とかしてよ。あなた彼と親友なんですよ。ガツンと言ってさ。そうしないと、あの人はますますエスカレートしちゃうよ」今まで聞こえなかった二人の会話が突然、僕の耳に入ってくるのを感じた。隣の少女が笑みを浮かべたが、僕はまったく気に留めず、二人の会話に集中していた。

「そうだな。さすがにここまで酷くなると放っておくわけにはいかないもんな」

「そうよ、変な電話を一日に何回もかけてくるし、この場所から私の部屋ずっと見てるし。それもニタニタ笑いながらよ。わたし、怖くてカーテン開けることすら出来ないんだから」

どうやら、美貴はストーカーの被害に遭っているようだ。そういうことなら、赤の他人の定史なんか相談せず、恋人である僕に相談してくれればいいのに。

「あいつは夢中になつたら周りが見えなくなつてしまふことがあるからな。わかつた。今度、強く言つておくよ」

そういつて定史は美貴の肩をそつと抱いた。俺の美貴の、俺だけの美貴の肩を。そして二人は静かに唇を重ねた。何度も何度も。「見て。私たちのほかに、二人の愛を盗み見る失礼な輩がいるよね」しばらく沈黙を保っていた少女がこの時を待つていたかのように突然、言葉を発した。少女の指差すほうには、冴えない眼鏡をかけて、これまた冴えない服装の僕、遠藤幸也が、木の陰から恐ろしい形相で二人をにらんでいた。

その姿を見て動揺した僕に、少女はさらに追い打ちをかける。「どう？ 自分を客観視してみて。みつともないわよね。自分の親友の彼女を勝手に好きになつて、勝手に自分が美貴さんの彼氏だという妄想に支配されて。これでよく自分はプロの医者だなんて言えたもんね」

「違う！ 違う違う違う！！ これは勝手にお前が作り出した幻だ。僕は美貴と付き合つていたんだ」

「いい加減にしなさい！ 自分の思い通りにいかない事実を認めず、そこから目をそらし、なかつたことにしようとする。拳句、二人の最愛の娘を死に追いやつた。あなたがしたことは決して許されるものではないのよ」

「美貴の遺伝子は僕のものだ。それを定史なんかに渡すわけにはいかない。どうせあれだろ定史が無理やり美貴をレイ・」少女が僕の言葉を遮る。

「もういい。あなたのそんな言い訳を聞くために私はこの世界に降りてきたわけじゃない」

## 結

「ねえ君、大丈夫？」

その声に引き戻されるように目が覚めた。悪い夢でも見ていたの  
であろうか。頭がくらくらする。

「よかった。立てる？」

気が付くと僕は、パーキングエリアの駐車場でうずくまっていたらしい。何が起こったのだろう。思い出せ。そうだ、突然由実に似た、いやあれは由実そのものだった。いずれにせよ、少女が僕に話しかけてきて、あれ？そのあと僕はどうなったのだ。何か恐ろしいものを見てしまった気がする。

「すまない。大丈夫だよ」

そう言いながら僕は立ち上がり、心配してくれた親切な女性のほうを見た。

女性は見たところ、20代前半くらいだった。おそらく女子大生だろう。僕は彼女を見たとき素直に綺麗な人だと思った。だが、どこかで見たことがあるような気がする。

「あの、すみません。一度お会いしたことありませんか？」

「ごめんなさい。思い出せません。私もどこかであなたとお会いしたことがあるような気がするのですが。すみません。私、忘れっぽくて」

そう言いながら彼女は心底申し訳なさそうな顔をする。そして必死に僕のことを思い出そうとする。そんな姿に僕は好感を覚えた。人が大人になると忘れてしまう純真さや真っ直ぐな心を彼女に感じただからだ。

「そんなに一生懸命、思い出そうとしなくて結構ですよ。もしかしたら僕の思い違いかもしれない」

「そうですねー。そうだ。名前を聞くと思い出せるかも。私、二条葉子といます。今は大阪で大学生やっています！」

唐突な自己紹介に少し戸惑ったが、僕もつられて自己紹介する。

「えっと、遠藤幸也と申します。一応、大阪で医者やっています」

「お医者さんですか、すごいですね。立派なお仕事だと思います。もしかして大阪出身ってことは、光観光のバスですか」

「ええ、そうですが。もしかして二条さんも？」

「葉子でいいですよ。なんか二条だと名前負けしてる感がすごくて嫌なんです」そう言いながら彼女は苦笑する。「東京へはお仕事ですか？」

「ええまあ。学会というやつです」

「わあ、すごい」本当に心の底から感心しているんだと、彼女の言葉の節々から感じられた。医者だというと、すぐに媚を売ってくる女がこの世には五万とあふれているが、彼女からはそういう打算的なものはいっさい感じられなかった。

「いや、ほんと大したものじゃないですから」あまり持ち上げられるのもどこかむず痒い。

「葉子さんは大学ではどういったことを学んでらっしゃるのですか？」

「私ですか。私は法学をやっています。夢なんですよ。検事になることが」

失礼だが、正直意外だった。だが同時に立派だとも思った。

それが二人の出会いの始まりだった。思えば、きっかけはあの奇妙な体験が発端だった。あの少女はなんだだったのである。由実に違いないが、間違いなく由実ではない別の何か。だが、彼女のおかげで、僕と葉子は知り合えたのだ。さしずめ、二人のキューピッドといったところか。そして僕が感じた既視感。今になって思えば、あれが運命を感じるというやつなんだろう。陳腐な表現かもしれないが、ほかに形容しようがない。

東京に着いて2日目の朝、奇跡が起きた。朝の散歩をしているときに、彼女と再会を果たしたのだ。

その後二人は、ともに朝食をとった。もうこの時点で、二人は運命を確信していた。

「おい、早くしろよ」

僕が一階のリビングから葉子に声をかける。引つ越屋が来る前に、二人で食事に昼食を食べようと言ったのは葉子のほうだ。それなのに、いまだ自分の部屋の荷物のダンボール詰めも終わってないとは自分の妻になる人として心配になるが、葉子は昔から、マイペースでふわりとしたところを持つ人であった。それが彼女の魅力でもあり、僕が惹かれたところでもあるのだ。

二階から駆け降りる足音が聞こえる。ドタドタとせわしない。

「何してるんだ。早くしないと置いてくぞ」

「待って待って。ほら見てよ。私の小学生のときのアルバムが出てきたの」

「そんなものでゆっくり見たらいいじゃないか」

「だって今までずっと見つからなかったのが、今になって出てきたのよ。見るしかないでしょ」

「なんでお前は自分のアルバムですら無くすんだよ。普通は大事に持っておくものじゃないのか」

そう愚痴りながらも、そういえば僕も葉子の小さいころの写真は見たことがなかったなと思いつつ、何気なくアルバムを覗き込んだ。そして僕は息をのんだ。世界がひっくり返ったかのような衝撃を感じた。由実だった。葉子は由実だった。彼女が嬉しそうに指差す写真は由実だった。

「ほら、小さいころの私もかわいいでしょ」

ちょっとあれはひどくないか。

そう？ 人の命を奪ったんだからあれくらいの報復は仕方ないんじゃない。まだ命をとってないだけ、ましと思ってくれないと！

いや、だがな。そもそもわしらには関係のないことだし。あまり介入するのもどうかと。

まっそうかもね。わたしたちは依頼者がいるわけでもないしね。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6108v/>

---

墮天使

2011年8月8日03時11分発行